



えと文

田代正子

遠い思い出

校庭の銀杏の木立に風が吹くと、金色の葉が音をたてて乱舞する。あまりの美しきについて見とれていると、「田代さん！」と先生から名さしをされて慌てたこと。礼拝に遅れては、デントン先生の「はやく！はやく」とあの独得の声で、がたがたとせつちかな足音に追いかけられて、あやうくお祈りの時間に間に合ったこと。夕陽が校舎の黒く長い影をテニスコートに落すころまで、上級生のテニスの試合を見ていたこと等々、稚い思い出も今では遠く、卒業後、欲等は葉にしたくもない私でしたが、だんだん欲が出てきて、もともと好きであった絵の汲めども尽きぬ芸術の世界へ、抜きさしならぬ程入って行きました。同志社の進歩的で、自由な空気の中に学んだことは私の中に今も強く影響していて、平和で心の暖まる絵を、終始描きたいと念願しております。

(同窓、堂木印象画藝員)